【6】

氏　名（本籍）	平　良（たいら）　直（すなお）（沖　縄　県）
学位の種類	博　士（学　術）
学位記番号	博　甲　第　2446　号
学位授与年月日	平成12年6月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	哲学・思想研究科
学位論文題目	沖縄の宗教的伝統における中心の象徴と神話的始源 —御嶽と神歌の宗教学的研究—

主　査	筑波大学教授	Ｐｈ．Ｄ．	荒　木　美智雄
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	棚　次　正　和
副　査	筑波大学助教授	文学博士	伊　藤　　益
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	古　家　信　平

論　文　の　内　容　の　要　旨

本論文は，沖縄の「御嶽」（聖なる山）と「神歌」（神々に捧げる歌）の抽象的意味を解読することによって，沖縄の宗教的伝統を一貫して支えている中心的構造を明らかにしようとするものである。論文全体の構成は，「序章」の予備的議論と，それに続いて展開される6章構成の本論と，締め括りとなる「終章」からなり，最後に参照「資料」の付記によって補完されている。

「序章」では，本論文が立脚している現代宗教学の視座を提出し，その課題を明らかにしている。従来の社会・文化諸科学の還元主義によって断片的に扱われてきた「宗教的なるもの」を，宗教現象それ自体の指示の次元で取り扱い，その意味の全体性を「統合的理解」にもたらそうとしている。それは，宗教現象の「普遍性」と「特殊性」，体系的構造的意味と歴史的文化的意味の統合的把握を重視する視座である。

そのような視座から，「第一章　沖縄の宗教研究の志向性と課題」では，従来の沖縄の宗教研究全体を批判し，沖縄研究の新たな課題を提出している。従来の沖縄研究は，沖縄の生きられた意味を近代諸科学の問題関心に解体して，「文化」や「民俗」という概念や言語の中に埋没させたが，その背後には，明確な「政治性」が読みとられ，「表象の危機」とも言うべき，科学の名の下に行われる「暴力」が指摘される。問題は，いかにして「他者」が正当に理解されるべきかという「解釈学的課題」として明らかにされる。言い換えれば，「他者」沖縄は，「原日本」として，あるいは「南島」として外から外の関心を言語によって解釈され意味づけられてきた。そのような「先行研究」は批判的に捉えられ現象に即してより深い，正当な意味把握によって克服されなければならないということである。

「第二章　沖縄の宗教現象における歴史的文化的特殊」では，その宗教現象を支える自然的・地理的風土からはじめて比較論的にその宗教伝統の特徴を把握し，その特殊性を（1）一元的意味世界，（2）象徴の非象徴的理解，（3）人と神の連続性，（4）女性の宗教的優位性，（5）歴史的現在の神話化への強い傾向，そしてとりあげ考察した。

「第三章　御嶽の中心の象徴と聖の顕現」では，まず，先行研究の批判に続いて，御嶽を「聖なる中心」，もしくは「聖なる空間」たらしめているものは，聖の空間への突入もしくは顕現という根源的体験であるという事実を説話や伝承の資料から確認し，伝承によってヒエロファニーやクラトファニーやエピファニーなど多様な類型を把握するとともに，その共通の構造を明らかにしている。また，同時に御嶽にまつわる説話の類型や特徴の分

析によって，「石」や「木」など，御嶽の具体的象徴の宗教現象学的意味を把握している。

「第四章　中心の生成とその展開」では，御嶽を中心とする共同体の歴史的展開を構造的に把握して，マキョ時代から按示時代へ，さらには琉球王朝時代へ拡大展開する共同体の歴史である。それは，御嶽から居城へ，居城から諸共同体へという展開であるが，常に，御嶽を聖なる中心として共同体が，宇宙のマイクロコスモスとして「生きられる宇宙」であることを保証し続けているということを明らかにしている。

「第五章　神歌における神話的始源」では，現代においても農耕，建築，機織りなどの創造的営みに際して儀礼的に歌われるさまざまな「神歌」の意味を神話の問題として解明している。それは，始源の時における神々の創造の行為を反復する世界の更新であり，人間的現実的世界の聖化であり，真正なる創造である。真正なリアリティへの参与によって，世界や事物の「存在」が確立される地平なのである。

「第六章　始源的模型と祈り」では，「予祝」儀礼の際に歌われる神歌の例を「アマヴェーダ神歌」にとって，そのような神歌の儀礼的行為を「祈り」の問題として捉え直すことによって，それが神々への「請願の祈り」であるばかりでなく，「神々の始源における創造の反復」であることを明らかにしている。さらに，そのような神歌に，「テキスト」・「行為」・「主題」の側面を確認し，「神話の範型」と「祈り」の連関のなかで捉えて，豊饒でダイナミックな意味連関があることを明らかにしている。請願の祈りは反復によって希求へと定型（テキスト）化され，始源への回帰の行為の反復は原初の時の創造を現前させ，そのような反復・現前を神歌のなかに「主題」化している具体例が，まさしく，『琉球国由来記』に代表される伝承やさまざまな神歌であるとする。そのような神話・儀礼がそのようなテキストで主題化されるのは，しかし，まさに「御嶽」の聖なる場所においてである。

「終章」においては，論文全体が反省的に再把握，再確認されている。

審査の結果の要旨

本論文は，従来の日本の民俗学や社会科学や文学によって行われた「沖縄研究」が一貫してとってきた視座や解釈の背後に隠された「政治性」や特殊な傾向を批判し，沖縄の伝統を外から「原日本」あるいは「南島」の文化や民俗として扱い，その結果，特殊主義的解釈に陥ってきたことを斥けて，豊に生きられてきた宗教的世界全体を十分汲み上げることを企てるものである。沖縄宗教を全体的統合的に理解解釈することを求めて，沖縄の宗教を宗教学的視点から「普遍的なるもの」を中心に探求している。

「御嶽」という宇宙中心の象徴的意義，「神歌」に見られる神話的儀礼的永遠回帰の構造やアルカイック・オントロジー，さらにはそれによって達成される宇宙，世界，人間の文化の諸側面や社会制度の基礎づけ方向付けなど，沖縄宗教の「普遍的なもの」，聖なるものの顕現（突入）による空間的時間的創造としての歴史的意味世界の基礎づけは，極めて鮮やかに解明されている。エリアーデ宗教学の導入によって沖縄の「普遍性」が解明されたことは高い評価に値するものであり，沖縄宗教研究史を中心にして周辺の宗教研究に新たな課題を提出しているものとして大きな意義を有する。

しかし，難点がないわけではない。沖縄の宗教的世界全体を解明しようとするとき，「普遍性」だけでなく「歴史的・文化的特殊性」も同時に解明することが重要であることは，本論文が指摘しているとおりであるが，その点で特に第２章の解明は必ずしも十分ではない。特殊が把握されるとき，その特殊から普遍をもう一度把握し直すことが可能となるということである。他の伝統とのさらなる比較研究が期待されるところである。また，沖縄の歴史上，常に宗教的伝統は連続して保持されていたのではなく，時に断絶や衰退の危機の局面があったのではないかどうか，そのようなプロセスに伝統はいかに創造的に対処してきているか。この点でも，歴史学的アプローチがさらに展開されるべきであろう。さらには，現代沖縄に生じている興味深い現象のデータが豊かに発見・収集されつつあるので，そのような展開にも研究対象を広げることは重要であろう。

以上のような問題点があるとはいえ，従来の沖縄研究において全く無視されてきた「宗教的普遍性」を宗教学

の視点から解明し，沖縄の宗教的意味世界に新しい理解をもたらしていることは高く評価される。学界に寄与すること多大であり，学位論文として十分に価値あるものと判断される。

よって，著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。